

第四章 シュネーゼル事変

時々、レーフラムは、詩を学ばなかったことを後悔することがある。考古学と、その背景になる歴史学、広範囲な戦史は学んだが、詩を学ぶ機会はいずれ得られなかった。

連邦圏の外れ近く、セイモスからデュレーン恒星区にかけて、若い星が多い。生まれてからまだ数百万年を経ていないような巨星と超巨星の密集する宙域。一部の恒星区では、特に巨星群の密集するマリューバー宙域を“すばる”と呼んでいる。ただし、“すばる”の謂れは、遠い歴史前夜の闇の中に溶け込んでいた。

その“すばる”宙域が目前にある。水素ガスの薄いベールを纏った無数の巨星が、支えるものもない宇宙空間に存在を誇示している姿が『ノースラン』号の艦橋スクリーンに映しだされた。詩を学んでいれば、と思ったのはそんな時である。

艦隊演習“オペレーション・ライオンハート”は、五〇〇〇隻の艦艇の参加する実戦さながらの演習だった。レーフラム自身、『ノースラン』艦橋に詰め切り、七日間にわたった演習が終了した時は疲れ切って、丸一日間眠り込んだものだ。

疑問に思ったのは、“オペレーション・ライオンハート”が、艦隊戦闘をシミュレートした演習だったことである。これまでの艦隊演習といえば、惑星上での叛乱鎮圧を想定した制宙権制圧と惑星への降下作戦が常識だった。三〇〇〇隻規模の敵艦隊を想定した、艦隊同士の戦闘演習など、レーフラムには初めての経験であ

る。大体、連邦圏には連邦空軍に匹敵する艦隊兵力を保有する勢力が存在しないのだ。唯一メルティアが有力な宇宙軍を持ち、二〇〇〇隻規模の艦隊を維持していたが、昨年の“メルティア紛争”で撃破された。惑星ターターでの戦闘に生き残った戦闘艦も、“五六年条約”の規定ですべて廃棄処分になった。

ヒューロザイオン出航前のブリーフィングのことを、レーフラムは思い出す。

「この演習のシナリオは既に読んだことと思うが……改造を完了した直後の辺境の惑星に、二〇〇〇から三〇〇〇隻規模の艦隊が侵攻、惑星の降下占領作戦を開始した、との前提が置かれている。惑星は、事実上無人であり、抵抗力を期待できない。無論、連邦の財産である惑星を破壊、ないしは汚染するような作戦は許されない。我々に与えられた課題は、惑星を保全しつつ、かつ許容範囲内の損害で、侵攻してきた敵艦隊を星系外へ撃退することである」

意味のあるシナリオだとは思えなかった。シュネーゼルへの異星人の侵略を仮定した演習に違いなかった。しかし、相手が完全なエイリアンだとすると、対等な戦闘が可能な軍事レベルを持ち合わせていると仮定するのは子供向けのSFドラマの見すぎだとは思えない。全く異なる系列を辿って進化したエイリアンが、シエルメス人と誤差数年の文明レベルに達している……この仮定は、あらゆる数値的な確率論を無視している。そんなことはあり得ない。

あり得るとしたら、敵はシエルメス人そのものでなければならなかった。少なくとも、さして遠くない過去に連邦と同じ祖先を持つ存在でなければならなかった。無論、その場合ですら、隔離

と環境の差異に基づく文明の発展の誤差は無視し得ない。しかし、荒唐無稽というわけではなかった。

「この場合、我が艦隊が敵艦隊の少なくとも三倍の兵力を保有している、との前提に立てば、課題の解決はわずかの困難をも意味しません。可能でしょうか？」

「それはシナリオを外れるな、大尉」

ハルバーステート参謀長は首を横に動かした。

「シナリオでは同兵力、もしくは五〇パーセント増しの兵力が、我々に与えられたことになっている」

敵より少ない兵力で戦えと命じないのは、この時期の連邦空軍の、軍隊としての健全さを意味するものだった。敵よりも兵力が少ないのであれば、無人の惑星を守るために強いて抵抗する必要はない。一時、惑星を敵の手に委ね、再攻すればよいのである。

「……であれば、恒星系内に有力な前線基地を、予め築いておきたいのですが、これは許されるでしょうか？」

「艦隊を駐留させるのか？」

「いいえ、精々第二級補給基地程度の規模のものです。戦艦の艦砲射撃と強襲揚陸作戦に数日は耐えられる程度の装甲と火砲を備えた。これが三ヶ所程度あれば、味方の損失を極めて低くして完勝できるでしょう」

「どうやるのだ？」

「簡単です。敵艦隊が基地に気を取られている隙を狙って、その中枢部にラピッド・パンチを叩き込むのです。無論、十分な索敵と通信、それに防諜のシステムが必須となりますが……」

「それはおもしろいな……詳細な作戦案を提出し給え。演習のシナリオに取り入れるのも悪くあるまい」

結局、レーフラムが提出した作戦案は“オペレーション・ライオンハート”のシナリオにはならなかった。“余りに状況を限定し過ぎる”というのがその理由だったが、恒星系ヴィルワの防禦態勢が、彼の作戦案に基づいて強化され始めたことも伝えられた。演習の終了直後の一〇日間余りは、それでも演習の結果検討に忙殺された。艦隊編成を再編し、艦隊運動のマニユアルを検討し、戦隊指揮官たちとのミーティングを繰り返す。

「若造が……」

特にミーティングは、若いレーフラムにとっては決して楽なものではなかった。叩き上げの前線指揮官たちの中には、若すぎる作戦参謀への反感を公然と口にする者も少なくなかったのだ。レーフラムが“天才参謀”とまではやされ、連邦空軍艦隊が彼の作戦に無条件で服するようになるのは、まだ先のことである。

「年齢だけを理由にして聞く耳を持たないというのは感心しない。柔軟さと節操のなさとは無論同義ではないぞ」

司令官のシユタルクは、レーフラムに無条件では好意的でなかった。が、ともすれば感情を高ぶらせがちな前線指揮官を宥めるためには、レーフラムの意見を擁護せざるを得ないことも一再ではない。

シミュレーションが行われ、その結果によつて更に艦隊の編成は修正された。レーフラムの意見を、“机上の空論”として排除していた戦隊指揮官たちだったが、シミュレーションでは彼の指揮する部隊を撃破できなかった。

「シミュレーションは万全ではない。特に、艦隊戦闘など、“メルティア紛争”で数度行われただけだ」

レーフラムに強かに叩かれた指揮官の一人は、憤然として食っ

てかかったが、これもシユタルクに宥められることになる。

「……だとしたら、貴官も艦隊戦闘に関しては素人同然だな、違うか？」

「……」

「ネレイド大尉も素人だ。素人と素人が戦った結果、片方の素人が優勢を占めた。優勢を占めた側の素人のやり方を真似るのは、無価値なことではないと思うが、どうだ？」

「それは……その通りです」

「では、そういうことだ。貴官には、ネレイド大尉の持たない実戦の経験がある。経験を生かして彼を補え」

一三月一八日、当直と作戦会議を終え、食事を済ませたレーフラムは、私室でキーボードに向かっている。旗艦『ノースラン』号に従うのは高速の巡航戦艦、巡洋艦、航宙母艦を主力とする約一五〇隻。旧式の戦艦、砲艦とミサイル艦を中心とする別働隊は、アンリー・シャルブック副司令官の指揮下に、やはりヴィルワ恒星系へ向かっている。

軍規では禁じられてはいるものの、非番の時間を即席のカップルで過ごす下士官や士官が少なくないことを、レーフラムは知っている。真似をする気にはならなかった。その驚くほどの美貌にもかかわらず、レーフラムの周囲には、いわゆる“浮いた話”の一つも漂っていなかったから、ナカースルに揶揄われたこともしばしばだった。

「こういうのが恐いんだ。思い込んだらただ一筋つてやつさ。つまり、現在のところは未だ意中の人に巡り合っていないってことか」

ナカースルは正しい、とレーフラムは思う。ただ単に、“その人”に巡り合っていないだけのことなのだ……と。そして、歴史は、彼のこの時の思いが正しかったことをやがて証明することになるのだが……それは、まだ先の話である。

レーフラムはキーを打ち、しばらく考え込み、またキーを打つ。ちよつと夢見るような視線の先で、綴られた文章がホログラム・スクリーンの中に浮かび上がっていく。

“連邦がまだメルティアと呼ばれる一惑星上の住民にすぎなかった頃から、そのネーミング・システムには顕著な二、または三種類の系列が見られる。一つは、姓を名の後に置くシステムであり、今一つは名を姓の後に置くシステムである。名のみで、姓を持たないネーミング・システムもごく一地方で見られるが、この系統については別に一章を設けることにし、さしあたり以下では先の二システムをメジャー・ネーミングと呼ぶことにする。

メジャー・ネーミングと、それぞれの恒星区に最初に移住した連邦市民の、メルティアにおける出身地は、別紙に示すとおり、極めて興味深い関連を示している。名を姓の後に置くシステムが広く行き渡っているのは、カイトウルウ、及びアール、ドレストレンなどのユロノス腕を中心とした恒星区。一方、姓を名の後に置くシステムは、タート恒星区を初めとする連邦圏の他の全域に広がっている。一方、これらの各恒星区の開拓年代と、第一期から第一〇期に至る開拓黎明期の移住者の出身地の関連を、別紙に示した。

最も興味深い事実は……”

タイプする手を止め、おそらくは発表する機会もないだろう論文の一部を読みなおした。無駄な行為であることは心得ていた。

連邦空軍が必要としているのは、彼の軍人としての才能である。宇宙考古者としてのそれではない。

『消去』キーを叩こうとして、レーフラムは気を変える。彼の指が叩いたのは、『待避』のキーだった。まあ、残しておこう。待避されたファイルはユアロフレスタの補給基地のデータバンクに納められる。レーフラムが戦死すれば、彼の名前で待避されていた全てのプライベート・ファイルは遺品として扱われるのだ。

もつとも……レーフラムの思いは皮肉である。父ナイザルにしたところで、レーフラムの遺した文書など、目を通しすらしないだろう。レーフラムはそれを知っている。知っていても、やはり『消去』キーを押す気にはなれなかった。

コンソールのスクリーンが、微かな電子音を発して瞬いた。

“親展”のサインとともに、ハルバーステート参謀長からのメッセージが流れる。

『ヴィルワ恒星系からの定時連絡が入った。作戦会議室へ出向かれたし』

何かあった、と思う。ヴィルワには四ヶ所の補給基地が建設され、約二万の兵力が配備された。指揮官は、第一〇辺境警備艦隊の副司令官だったペルヴィッツ大佐が准将に昇進の上、派遣されている。ペルヴィッツは、デュレーン恒星区方面の海賊鎮圧に功績があり、優れた戦闘指揮官として知られている。もつとも、第二級以下の補給基地は電子哨戒船と少数の突撃艦以外に一隻の艦隊も持たない。そんな基地の司令官がペルヴィッツのメンタリテイに叶ったものかどうかまでは、レーフラムの知るところではない。

「ペルヴィッツ准将からの通信シャトルが届いた。“トロヤの懸

け橋”方面に派遣している哨戒船部隊が、宇宙艦隊の接近を捕捉したらしい」

ハルバーステートは前置きを口にしなかった。

「宇宙艦隊？」

「一〇〇〇隻規模の艦隊と思われる。推測が多いのは、情報が十分に取れていないからだ。エルヴェニツクが弾きだした、仮想コースにそって哨戒船を貼りつけてあるが、どこにワープアウトしてくるか予想がつかないからな」

「ただし、推定目的地は、やはりヴィルワ・シュネーゼル。これは、ほぼ間違いない。それから、この宇宙艦隊が、我々のものとほぼ同規模の戦闘艦を主体とした戦闘艦隊であることも……だ」

「戦闘艦隊？」

「つまり……」

エルヴェニツクが、咽喉にからまる痰を無理に切るような声を発した。

「最悪の予想が的中した」

「戦闘になる？」

「いや……そうではない」

シュタルクである。

「戦争になるかもしれない、ということだ」

「……戦争ですか……」

レーフラムの返答は芸がない。五六五年の第九次レアナ暴動、五六六年の“メルディア紛争”に参加はしたが、それらは“戦争”と名付けられるような大規模な戦闘ではなかった。まして、この時には“敵”と呼ばれる相手の正体すら判然としていない。

「エイリアンの艦隊だということだな。学問的には、我々シエルメス人と全く異なつた経緯を経て、高度な文明段階に達したエイリアンの遺伝的特質……このあたりが最大の興味の的だということだ」

聞き慣れない、しかし、不愉快な響きを帯びた声を耳にして、レーフラムは銀白色の眉を歪める。気づかなかつたが、フォアマン・ストーンウエル軍医大佐が、第三艦隊司令部と肩を並べていた。

フォアマン・ストーンウエル……「マッド・ドック」とあだ名される狂信的医学者。

「ぜひ、捕虜を……それも生きた捕虜を捕らえてもらいたいですが、シユタルク閣下」

「無論……しかし、ドクタ・ストーンウエル、わたしは『ノースラン』号のみならず、第三艦隊のどの艦艇の上でも、ドクタが学問的な興味を充足させることに許可を与えることはできない。我々が捕虜を望むのは、情報が必要だからだ」

「生物学的な情報を得ずして、有益な情報を得られるものですか、提督。生物学的・遺伝学的な特徴を解析すれば、最も有効な生物・化学兵器を製造し、運用することができる。馬鹿でかい宇宙戦艦など、わたしに言わせれば無用の長物です」

長身で、中々に端正でもある。「マッド・ドクター」と呼ばれる怪物的な雰囲気は、その容貌からはさほど感じとることはできなかった。

「艦隊司令部が、貴官の同行を許可した所以は、捕虜を捕らえた場合の防疫的な処置に関するアドバイザーとしてだったはずだ、ドクター。越権行為は軍法会議の対象となる。貴官も一応は軍人

であるはずだからな」

「では、そういうことにしておきましょうか、シユタルク閣下。しかし、これまでとは全く異なつた生物・化学兵器体系を完成させるとなると……いや、そのような兵器体系の発注を受けられるとなれば、連邦の軍需産業は随分と潤うのではありませんか」

「ドクター……」

シユタルクの声はつきりと嫌悪の響きを帯びていた。

「ドクターが個人的に誰と交際するか、そこまでを連邦空軍は制約しない。しかし、個人的な交遊関係を、軍組織にまで持ち込まれるのは迷惑の至りだ。まして、軍需産業云々は、一艦隊のレベルで語るべきことではない」

「建前はそうですね」

「では、退席して頂こう。貴官がこれ以上、この席にあつても、双方にとってさして有益ではあるまい。防疫システムに関するレポートの提出を求めてあつたはずだが、まだ完成していないのであれば、急ぐことだ」

「提督……」

すつと血の気が引いたようだった。レーフラムは、ストーンウエルの肉の薄い頬が引きつったように痙攣するのを、生理的な嫌悪感を持って眺める。見せ掛けの端正さが薄れ、何かしら見るものを不快にする、偏執的な表情がストーンウエルの容貌を覆つたように見えた。

「シユタルク提督、わたしを余り侮辱されないことだ。わたしは、第三艦隊の指揮系統には属していない。連邦大統領に近いところからの直命を受けているのですぞ」

「軍務承行令も知らないようでは、大佐の肩書は不要かもしれ

ないな、ドクター。貴官が大統領自身でないかぎり、艦隊における最高指揮権は艦隊司令官に与えられている。たとえ貴官が大統領その人であったとしても、艦隊そのものの指揮権は依然として艦隊司令官に委任されている。それに、私は貴官を特別扱いするいかなる特命も受けていない」

「建前だけで全てが片付くなど考えるのは、世間知らずもいいところですね。わたしは……」

「自分で出ていくのが嫌なのか。ならば放り出すまでだ」

軽装の機動歩兵二人が現れ、“マッド・ドクター”の左右に立つ。険しい視線をシユタルクに注ぎ込んでいた“マッド・ドクター”は、音高く舌打ちして席を立った。一同の上に走らせた尊大な視線は、しかし、冷淡な、あるいは侮蔑に満ちた表情に迎えられただけだった。

「全く嫌な野郎だ……あんな奴を載せておくだけで艦が汚れるつてものだ」

エルヴェニツクの呟きは、大佐という“マッド・ドクター”の階級への敬意を欠片ほど留めていない。

「どうせシユレフ・コングロマリットとの個人的なコネで乗り込んできたんだらう。新しい兵器体系受注のビッグ・チャンスだとしても言うて」

「私語を慎め、エルヴェニツク大尉……“マッド・ドック”はしばらく措くとして、シユネーゼルが現実に異星人からの脅威を受けてきたところを見ると、これではつきりしたわけだ。戦闘艦隊を率いてきたところを見ると、彼らが……この表現が妥当かどうか、自信がないが……彼らが、平和的な目的を持っているとは思いがたい。最悪のケースを予想して、迎撃戦の用意が必要だらう」

求められるままに、レーフラムは幾つかの作戦を提案する。ヴィルフ恒星系の外縁に、予め艦隊を展開して異星人の艦隊を迎え撃つ。シユネーゼルへの侵攻を図るなら、彼らはヴィルフの外縁にワープアウトせざるを得ない。ワープ中に、ワープアウトポイントの状況を探ることは不可能に近いから、戦術的に決定的な奇襲が可能となる。

反論はハルバーステートから出された。

「それでは、彼我ともに問答無用の戦闘に引きずり込まれてしまふ。無論、それしかないというのであれば止むを得ないが」

「ええ、これは最悪のケースを想定した作戦です」

用兵者としてのレーフラムの欠点を、政治的な視野の欠如にあると指摘する研究者は多い。彼の敵手となったクローネス・マールク元帥が、本人の意図するところではなかったにせよ、優れた政治的見識を持ち合わせていたことと対比させての批判と言えなくもない。もちろんレーフラムが、政治的な見識を全く欠いていたわけではない。

「連邦の存在を明示した上での外交交渉が打診できれば、ベストであると考えます。異星人が具体的に敵意を示したというわけではないのですから」

「難しいところだが……やれないこともないな」

賛意を示したのはエルヴェニツクである。

「言葉も分からない異星人かも知れない。しかし、運がよければ相手も人間型だということもあり得る。連邦空軍コンピュータ複合体の機能を全開にすれば、意思の疎通が完全に不可能というわけでもないだらうし」

レーフラムは続ける。交渉の意思を示し、なお、“敵”が敵意を

示し続けるのならその時は戦闘も止むを得ない。その場合も、相手の補給線を叩いてシュネーゼルから撤退させれば十分である。この時、レーフラムは交渉の意思を通じるにあたつての素案も併せて示している。

いずれにしても、シュネーゼルとその周辺での情報収集は綿密に行われなければならない。哨戒の密度を上げること、報告を絶やさぬことをペルヴィッツ准将に命ずることを決して、その日の作戦会議は幕を閉じた。

共和国暦七十七年六月五日、ヒュンテ・クリュッペルの第八艦隊は、ヴィルワ恒星系外縁にワープアウトする。八〇〇隻の戦闘艦と三〇〇隻近い輸送船と補助艦艇は、一隻の落伍もなかった。

「どうにか、ここまで来たな……」

クリュッペルは、参謀長のオルデンドルフを振り返った。

「コーウィンが有人かどうか、まず、調査の必要があると思いませんか」

「コーウィンへ哨戒部隊を送れ。電子哨戒船を含んだ部隊だ。それから、惑星上への降下準備」

「外惑星の調査の必要はないでしょうか？」

コーウィンの属する恒星系には、少なくとも四つのガス状の外惑星が存在する。いずれもまだ生成の新しい惑星らしく、かなり濃密な水素ガスと、外惑星特有の外惑星環を生成するに至っていない宇宙塵流、そして多数の衛星を従えている。特に巨大なのは第六惑星で、一〇〇を超える大小の衛星と濃密な宇宙塵流に取り囲まれている上に、電磁放射が激しい。特に宇宙塵流は、半径数

百万キロもの広大な宙域を球状に第六惑星を覆っている。

艦隊、特に多数の艦隊の運用には最悪の環境だった。

「このままの角度で恒星系内に進入するとして、この第六惑星から数百万キロ……この塵流帯の端をかすめるポイントを通過することになります」

軍事基地を設けるとして、この第六惑星はベストに近い地勢を持つている。また、第四惑星も、第三惑星のコーウィンに最接近しているらしく、三〇〇〇万キロを隔てているに過ぎない。

「コーウィンが有人惑星でないなら、第四惑星や第六惑星に基地がある可能性は低いな……いや、待て、コーウィンが植民惑星であれば、という可能性もあるか……」

「いかがしましょう。哨戒部隊を派遣しましょうか？」

「手配してくれ……」

クリュッペルは、自分が戦闘指揮官としてはどうか水準か、それ以下であることを知っている。不用意に第六惑星……シエルメス人たちがヘルムと呼んでいることを、彼らは知らなかったが……に接近する愚を犯さなかった。

四波合計三〇隻の電子哨戒船と一〇〇隻に達する護衛の駆逐艦とフリゲート艦がコーウィン……シュネーゼル……に派遣された。一方、第四惑星……リユート……と、第六惑星ヘルムには、それぞれ二隻ずつの偵察艇が送られる。

「二重哨戒は行わないのですか？」

オルデンドルフに異議を唱えたのは、若い情報参謀の一人である。戦場を前にしたマールク艦隊の哨戒の緊密さには定評がある。二重哨戒は最小限度の定石であり、マールクは想定戦場を数万の区画に分割し、最小限度二つ以上の哨戒部隊が同一の区画を哨戒

するよう手配を行うソフトウェアを開発させていた。しかし、この時のオルデンドルフは、マールク艦隊にとつての定石を打たなかった。

「いや、いらないだろう。別に戦場を前にしているわけではないのだから」

コーウィンに関する情報はまもなくもたらされ始める。所々に局所的な重力異常が見られる以外はノーマルなル・ヤント母星型の惑星。赤道直径は一万三三〇〇キロメートル。海陸比は七対三。七つある大陸の二つが北半球温帯地方、三つが南半球の温帯地方、残り一つが赤道直下から南北回歸線に広がっている。南北極には大規模な氷冠がみられるが、大陸が存在する兆候は見られない。都市らしいものはなく、また開拓の拠点と考える電波源も現在のところは発見されていない。

「これは……驚くほどの幸運と言わざるを得ません。これほど共和国母星にそっくりで、しかも居住に好適な惑星が天然に存在する……などとは……」

「植民星だとして、まだ入植も行われていないのは不思議だ。コーウィンが発見されてから三年以上になる。共和国であれば、これほどの惑星を三年以上も無人のままに放置しておくことはあり得ないだろうな」

コーウィン・シュネーゼルの惑星改造が完了したのは一〇年前。五年間の安定期間をおいた上で、連邦政府の査察と調査があり、入植許可が下りるはずだった。それが五年間棚ざらしになっていたのは、同時期に改造の完了した惑星が多数に上ったためと、連邦政府の官僚的な事務の怠慢によるものに過ぎない。「ドレド戦役」で自ら居住圏を汚染し尽くし、人口増加の圧力に喘いでいる

ル・ヤントからは想像もつかない理由ではあった。

注意すべきだったとも言える。特に外惑星の原初の姿を留めたままの第六惑星ヘルム。誕生して数十億年の歳月を経た、穏やかな惑星の外貌を見せるコーウィンとの激しすぎる落差から、コーウィンが改造された惑星であるとの結論に達し得なかったのは、第八艦隊司令部の明らかな見落しである……と。

しかし、ル・ヤントでは、原初惑星の改造は未だ未来技術に属している。

「第四と第六惑星の探査結果はまだか？」

「第六惑星に向かわせた電子哨戒船が水素気流と宇宙塵流に巻き込まれて大破してしまいました。代替の哨戒船を送りましたが、予定より三時間遅れています……第四惑星上は大規模な砂嵐に覆われており、効果的な哨戒ができなかったとのことです。一時間後に第二の哨戒部隊を派遣することにしております」

「文明の存在の兆候でもなかったのか？」

「現在、入手できたかぎりの情報を解析させておりますが、肯定的な結論には達していないようです」

そうか、と頷いて、クリュツペルは考えに落ちる。

セオリー通りなら、このまま艦隊を恒星系外に留めて情報を収集し、敵対する存在の有無を確認するべきところである。

「後方参謀……」

「は……余りよくありません。次回の補給部隊は、五日後にならないと到着しません。第七艦隊の兵站部隊を一時的に流用してもらっていますが……なにしろ、第七艦隊自体が新設の艦隊でして、いまひとつスムーズに動いてくれません」

「それで、現在の保有量は？」

「食料が最も苦しく、後一〇日分を余すのみです。その他の消費物資、及び戦闘物資もさして余裕がありません。食料以外の消費物資も一五日分を切りましたし、戦闘用資材は定数の半分に切り詰められています。その分、食料を積み込みましたから」

「あまり無駄はできない……というわけだな」

「ル・ラント回廊宙域」に本格的な補給線を築かないかぎり、コーウインの開拓といっても楽じゃありません。前進基地を築いても、維持が大変でしょう」

「それは分かっている」

惑星への降下部隊はとにかく前進基地を築き、コーウイン開拓のためのベースを作ることになっている。しかし、参謀本部第四局兵站課から割り当てられた前進基地用の資材は、一〇〇人が三カ月をぎりぎり過ぎる程度の量でしかない。コーウイン自体は無限の可能性を秘めている。しかし、現在は丸ごとの惑星にすぎない。何の生産能力があるわけでもないのだ。

「不足である。せめて一年分を」

クリュッペルの要求は、しかし、参謀本部得意の決まり文句で却下された。

「補給を要求するのは敗北主義である」

ここまで来ると茶番である。ドライバオム要塞の兵站監、ウォロンステット・オレーグ准将に頼み込んで、一〇〇人が一年を過ぎせるだけの資材は辛うじて調えたのだが。

「これで国家的な壮挙だと言ってくれるんだから、笑わせる。参謀本部なんて所で偉くなるのは、おつむのネジのいかれた連中なんだろう」

少なくともドレドが開拓されたところにはこんなことはなかった

はずだ。補給を要求する都度、「敗北主義」だと却下されていては、探險や開拓などできるものではない。

「一個艦隊を動員し、七個師団をまず降下させる……なるほど、壮大な作戦だが、その結果がただか一〇〇人が駐留するユニツトハウス二〇戸とはね……」

「オルデンドルフ……」

「は……」

「行こう。時間の余裕は余りなさそうだ。この様子では七個師団も降ろす必要はない。一個連隊も降ろせば十分だ。余分の資材は前進基地の建設と拡張に充てることにすればよいだろう。手配してくれ」

五月六日、クリュッペル艦隊はヘルムの公転軌道を越えた。

「異星人艦隊、ヘルム軌道通過。シュネーゼルへの航行開始」

「……」

第四番惑星は直径五五六〇キロ。シュネーゼルの一〇〇分の一の希薄な大気に覆われた砂漠の惑星である。この惑星地下に連邦空軍の前衛基地があり、ペルヴィッツ准将の司令部が置かれている。

この時期に砂嵐が第四番惑星を襲っていたのは、クリュッペルにとって幸運なことではなかった。彼の派遣した哨戒艇は、この砂嵐に阻まれて二度とも基地の探知に失敗したのである。

一方、ペルヴィッツの方は全神経を逆立ててクリュッペル艦隊の動向を監視しており、支払った努力に正当に報われていた。ヘルムの衛星と外惑星環に擬装した監視衛星は的確にクリュッペル

艦隊を捉え、ペルヴィッツが要求して配備された亜空間滞留型宙雷艦……通称潜宙艦……は、ヴィルフ恒星系深くに進入する共和国艦隊を巧妙に追尾しつづけている。

ペルヴィッツは知らなかったが、奇妙な偶然がある。彼のファースト・ネームは、偶然ながら、ル・ラントがシュネーゼルを呼ぶ名前に他ならない。知っていたところでペルヴィッツはさしたる感銘を受けはしなかっただろうが。

“異星人艦隊は、戦艦約一〇〇、巡洋艦三〇〇に駆逐艦、及び突撃艦種四〇〇。空母一〇から二〇を伴う。なお、補給船、惑星用強襲揚陸戦艦、降下支援艦など約三〇〇”

戦闘艦は約八〇〇。支援艦艇が三〇〇。兵力にして二、三〇万を超えない。しかし、有力な戦闘艦隊を持たないペルヴィッツの部隊にとつて、敵に回すには手強すぎる。

五月七日、クリュッペル艦隊は、監視の目に気づかぬ内に第四番惑星軌道を通過する。一定の間隔を置いて、超空間波ビーコンの発信装置が配置されているのも報告された。

「……つまり、後続の部隊がある、あるいは補給部隊との会合の準備をしている……というところだ」

ペルヴィッツは正しく判断し、シユタルクから指示された作戦を実行に移すべきタイミングだと判断した。

慎重に選択された周波数が用いられた。万一の危険を考慮して、発信機はヘルムの衛星群の中に置かれた。シエルメス人が、メルティアの地表に縛り付けられていた時代に考案されたメッセージが、レーフラムの手によって“ユースレスク”のデータバンクの底から掘り起こされていた。単純なパルス符号で素数を繰り返し発信する。同時に多重の周波数変調をかけて最も基本的な数学公

式と物理定数をメッセージに折り込む。数学公式と物理定数は、異星人同士が最共有し得る可能性の最も高いものと考えられた。一連の公式と定数のメッセージが終わると、連邦公用語の基本文法、ついで最終的なメッセージ“我々は敵に非ず。話し合いに応じられたし”が発信されたのである。無論、この間もパルス通信による素数の繰り返しが続けられた。

「始まった……」

エルヴェニツクがヘッドセットを軽く押さえた。第三艦隊はヘルムから三光時の空間に身を潜めている。

「発信が開始された……」

レーフラムは知らず、組み合わせた手に力を込め、驚くほど深く澄み切った瞳を、シュネーゼルを映しだすメイン・スクリーンに据える。始まった。連邦の、いやシエルメスの歴史で初めての異星人との接触が。結果は……

「なに……素数だつて？」

「は、素数です。素数をカウントする電磁波のパルスと超空間波が、第六番惑星の衛星軌道から発信されています」

「天然のもの……ではないな……」

クリュッペルは、情報科学そのものにはさして造詣が深いわけではないが、常識として心得てはいる。素数を発信する天然の電波源などあり得ない。

「素数以外の情報はキャッチできないのか」

「今のところ、素数だけです。現在一〇〇万を超えて、なおカウント・アップが続いています」

「数学者達に知らせてやれば喜ぶかもしれない。素数が無限か有限かの議論を終わらせて、もっと有意義な議論を始められると」

「一つ議論を片付ければ、次の議論の種を見付けるでしょう」

さして建設的でない意見を述べてから、オルデンドルフは話題を数学から軍事へと引き戻した。

「やはり異星人でしょうか」

「だろうさ。一つ、素数が天然に発信されることはあり得ない。

二つ、共和国はこの宙域に発信機を設置していない。三つ、通常の電磁波だけでなく、超空間波を併用している……明白に異星人のものだ。幕僚を集めてくれ、会議を開く。別命あるまで、コウインへの降下は継続する」

未踏査に宙域への進出であれば、当然それなりの科学者のグループが伴われているだろうと推定、あるいは希望したのはレーフラム・ネレイドである。学究を志望した彼らしい希望的観測と言えない事もない。しかし、現実には全く異なる様相を見せた。実際問題として、クリュッペル艦隊には一人の科学者も随行していなかったのである。共和国政府と参謀本部は、科学者の随行の必要性などには全く思い当たっていなかった。マールクでさえ、天文学者、物理学者、生物学者などの随行を思い浮かべなかったのだ。

もっとも……と、辛辣に批判する声がないでもない。マールクなり、クリュッペルなりが思いを致して大学関係者の参加を募ったとしよう。

「共和国の外側は我々の専門外だ」

共和国には、共和国圏外の領域を専門とする学者は存在しないにもかかわらず、彼らはそう答えて、クリュッペル艦隊への参加を拒絶したに違いない。

彼らは行つたに違いないのだ。

「これは専門家の領域だから」と。

一方、生粋の軍人の想像力の枠は、一般に考えられているよりも遥かに狭いのが常である。

「軍人、特に参謀にとつて最大の財産は想像力である」

と喝破した天才的な軍人も過去には存在した。しかし、現在の共和国宇宙軍では、想像力は最大の敵として扱われていることが多いのだ。

「実際のところ、わたしは臆病なんだと思いますね」

マールクはアリシアに言ったことがある。

「あの惑星の陰、こつちの小惑星の地表、中性子星の近くに敵が隠れているんじゃないか、と恐くてたまらない。こちらの作戦を一から十まで読まれているんじゃないかと、いつもびくびくしている。だから、索敵は十分にしないと気が済まないし、できるだけたくさん兵力を揃えて、相手に小細工させないようにする。自然にそうなってしまうんです」

だが、マールクと彼の幕僚は常に異端視され続けている。びくびくして綿密な警戒を実施し、補給と通信を完全に整えて、十二分の兵力を整えるよりも、「必勝の信念」だけを信じて単艦で敵中に躍り込むのがより軍人らしいと信じている、大部分の軍人たちによって。決定的な瞬間に立ち合っていたクリュッペルの幕僚たちが、標準的な軍人であつたことは、記録されている作戦会議の資料を繰ってみれば瞭然とする。

「コンタクトを求めるのなら、素数などを発信せずにもっと明瞭な形式の通信にするべきでしょう」

「最も怪しいのは……我々がコーウィンに降下すると同時に、この発信が始まったという事実です。異星人は、コーウィンにセンサのみを配置し、第六惑星には発信機を配置した。コーウィンに誰かが降下したら、発信される警報に違いありません」

「素数を、単なる電磁波で発信しているのは偽装です。その証拠に、超空間波を併せて発信しているではありませんか。これは、異星人の母星へ警報が送られているというにより明らかな証拠です」

「コーウィンに橋頭堡を築き、迎撃の準備を急ぐ必要があります」
「橋頭堡を築くだって？」

クリュッペルはうんざりした。

「そんな資材がどこにあるんだ。現実を見てものを言え。教科書に書いてあることを、そのまま口に出しても解決にはならないぞ」
口に出さなかった参謀もいたようだった。

クリュッペルの許可を得ないままに、超空間通信による報告が幾度も共和国母星へ送られる。参謀本部から艦隊に配置されている艦隊参謀達にとつての上官とは、艦隊司令官であるクリュッペルではなかった。彼らの多くは、彼らの主観で色付けされた内容を「客観的な事実」として母星の参謀本部へ通報したのである。

「コーウィンにおいて、ル・ラントに敵意を持つ異星人と遭遇。臨戦態勢に入る必要ありと認む」

「コーウィンは異星人の母星。第八艦隊はブービー・トラップにかけられた。至急、救援を乞う」

「異星人は強力な監視装置をコーウィンに配置。第八艦隊は、現在、異星人の監視下にあり」

などなど……第八艦隊から発信された報告は数百に上り、しか

も、ほとんどが暗号化されていなかった。急激に活発になった共和国の第八艦隊の通信を、当然、連邦空軍第三艦隊は傍受する。数百通、数万語に達する平文のテキストが入手できたのである。

「ユースレスク」にとつて、共和国公用語の基本的な文法と語彙を解析するには十分な量だった。

「……あの異星人は、自分たちを「ル・ラント」と読んでいる。「トロヤの間隙」のむこう側、例の暗黒宙域が、彼らの勢力圏らしい」
連邦暦一四月二日、エルヴェニツクからもたらされた報告にレーフラムは驚く。「ル・ラント」は、連邦を明らかに敵と見なし

ている。
「ほとんどが警報と増援の要請だ。我々の呼び掛けを解読しようとさえしていない。受信と同時に警報をわめきたて始めている」
「つまり、彼らはシュネーゼルの侵略……軍事的な占領を狙ってきた。それが、先住民族からの通信らしいものをキャッチしてうるたえている……そういうことになるのか？」

「残念だがそのとおりだ、ネレイド大尉。哨戒艦からの報告では、彼らは戦闘態勢を取り始めている。こちらからの通信の解読を行わない……解読できる科学者のグループを連れてきていないことになる。つまり、彼らの目的は、探検ではなく軍事的な侵攻作戦ということになる。軍事的侵攻であれば、科学者のグループを連れてくる必然性はない」

エルヴェニツクの分析は、一部の真実と大部分の誤解を含んでいる。しかし、レーフラムも、彼の分析を否定できるだけの情報を手にしているわけではない。

それにしても「ル・ラント」とは……

レーフラムは、古い伝承を思い出す。「ユン・ル・ワントの星」

と呼ばれる、シエルメスの祖先の星が、銀河系の他の領域に存在すると伝えた伝承を。もつとも、伝承をそう解釈したのはレーフラムが最初で、おそらくは最後であろう。「ル・ラント」と「ル・ラント」。この発音の相似は偶然だろうか？

「しかし、それにしても解読が早かつたじゃないか？」

「それだがね……」

エルヴェニツクは薄いレポートを手に取る。『ノースラン』号に、囑託として乗り込んでいる大学院生の提出したレポートである。

「テリー・テラサキ・リヴァーズ。連邦総合大学古言語研究室の学生だ。優秀な男だよ。彼が、解読を事実上指導した」

「それで？」

ユイナリッシュ

「連邦公用語の、非常に古い形態と、文法の組み立て、語彙、アルファベット、単語などがかなり似ているらしい……というか、連邦公用語と同じ源流を持つ言葉のようにさえ思える、とのことだ。解読が早かつたのはそのせいもある」

「連邦公用語と同じ源流だって？」

「ああ、その気になれば、数か月で、一応は喋れるようになるんじゃないか、リヴァーズはそう言っている」

レーフラムは考え込む。「ル・ラント」との発音の相似に続いて、こんどは公用語の相似……伝説は本当だったのではないか？

「ならば、エルヴェニツク大尉、簡単なものでいいから、彼らの、つまりル・ラント公用語でメッセージを組めないか？ 今のままでは、彼らの警戒心を刺激するだけだと思うんだが」

「……できないことじゃない。一日あれば、リヴァーズがなんとかしてくれるだろう。そつだな、面白いアイデアだ。さつそく……」
耳障りな警報音。エルヴェニツクを呼び出したのは、艦の中枢

コンピュータである。割り込まれて不機嫌になったエルヴェニツクに、コンピュータは告げた。瞬間、第三艦隊の司令部は、愕然とした視線を見交わして、その場に凝固した。

「第四番惑星リユートのペルヴィッツ司令官より、入電。リユート補給基地は一月二日現在、ル・ラント艦隊からの無警告攻撃を受け、自衛戦闘に突入せり」

当事者の双方、または一方にその意思がないにもかかわらず、全面戦争に突入してしまう例は、連邦と共和国の歴史に枚挙のいとまがないところである。そのような場合、往々に見られるのが一種の“間の悪さ”である。

クリュッペルが判断に迷い、艦隊参謀たちが自らの判断で母星への通信を乱発している時、哨戒船が第四番惑星リユート上の連邦空軍基地を発見したのだ。

「惑星上に大規模な基地を発見。少なくとも要塞レベルの基地が四基、惑星の赤道上に設置されている」

「もう間違いない。異星人は我々を攻撃するつもりなのだ」

艦隊参謀たちは自らの恐怖を戦術論にすり替えて、クリュッペルに迫った。

「断固、先制攻撃あるのみ。時を移せば、敵の母星からの増援も到着する。惑星上の基地と、敵艦隊に挟撃されては苦戦は免れない」

「断固、断固として一撃を加え、異星人に共和国宇宙軍の威力を知らしむべし。司令官の決断を乞う」

クリュッペルが一日、決断をのばしておればよかった。エルヴェ

ニツクは、共和国公用語でメッセージを発信する余裕を与えられたらう。無論、共和国第八艦隊の艦隊参謀たちは、それすら“謀略”と強弁したかもしれない。しかし、クリュツペルが正確な判断を下せるだけの十分な情報で、それでもたらされたに違いないのだ。

だが、艦隊参謀たちの“要求”は強引を極めた。彼らは士官室に集まり、声高にクリュツペルを批判する。

“なんとこの不決断、優柔不断の司令官か、もはや頼むは我らのみ。司令官を監禁してでも、自衛戦闘に突入すべし!”。

実際、やりかねなかった。“ドレド戦役”でも、多くの艦隊が、艦隊参謀の“造反”のために無理な戦闘に突入させられ、全滅したものだ。艦隊参謀たちは、しかし、最初に旗艦から退艦し、生命を全うしている例がほとんどである。

クリュツペルは決断した。第四番惑星上の未知の基地は叩く。異星人の艦隊が到着しない前に、第八艦隊を率いてコーウィン撤退する。追撃されても、“ル・ラント回廊宙域”以降は、共和国宇宙軍の制宙圏と言っている。マルク艦隊の支援が得られれば、不利な戦闘はしなくても済むだろう。

共和国暦七十七年六月二〇日、連邦暦五六七年一四月四日、共和国宇宙軍第八艦隊は、コーウィン・ペルヴィッツ准将が守備する惑星リュートの補給基地を攻略するべく、衛星軌道上に展開した。“シュネーゼル事変”の開幕である。

“異星人艦隊、戦闘態勢にて接近”

ペルヴィッツは、報告書を黙って読み下した。彼の基地には戦

闘要員が二万しかない。接近してくるのは一〇〇隻以上の艦隊。少なくとも二、三〇万の兵力を持つ、堂々たる制式艦隊である。動揺を顕にしても、ペルヴィッツを臆病と非難する者は少なかったらう。

「迎撃戦闘を準備せよ」

ペルヴィッツは各部署の責任者を集め、短い指示を下した。日常の事務処理を命じることとして変わらない調子である。

「遅滞戦闘。長くとも三日間、異星人の艦隊を衛星軌道上に釘づけにする」

万一の場合を想定して、第三艦隊司令官の名前で送られていた作戦がペルヴィッツの手元にあった。異星人艦隊をリュートの衛星軌道に貼りつける。リュート基地の抵抗で、彼らの戦線が固定したところを、第三艦隊が急行して中央突破攻撃をかける。

「異星人艦隊は、第三艦隊の行動の意図を掴むに苦しむ。我々を救援におもむいたのか、それとも艦隊戦闘を挑むつもりなのか。うまくすれば、まったくの不意打ちすら可能になるし、悪くとも戦略的な奇襲にもなり得る」

言い切り、一同を見渡して敬礼した。

「貴官等の勇戦に期待するや、切である」

一四月三日、連邦空軍第三艦隊は、アンリー・シャルブックの別働隊と合流する。短い打ち合わせの結果、シャルブック少将はそのまま別働隊を率いてリュートへ向かい、シャルブックは高速艦隊を率いて迂回路を取る。

「リュート基地とシャルブック部隊で異星人艦隊の戦線を膠着させ、側面、もしくは後背からシユタルク提督の本隊で中央突破攻撃を敢行、一気に異星人艦隊の指揮中枢を衝く。指揮の中枢を

失えば、異星人たち……ル・ラント人たちは撤退せざるを得ない」

作戦を解説する若い……ほとんど少年といつていい先任参謀の姿に、歴戦のシャルブックでさえ驚いた。彼の若さに驚き、その端正な美貌に感嘆し、そして作戦のシャープさに驚嘆した。

「あれはできる参謀だ。やってみようじゃないか」

若さに呆れ、少年の面影を遺した美貌に頼りなさを感じ、作戦の大胆さに不安を訴える幕僚を、シュタルクとシャルブックは抑えた。

「悪くしても、我々は合わせて三〇〇隻。負ける戦ではない」

リユートの補給基地を巡る攻防は、共和国宇宙軍第八艦隊の斉射で開始された。厚い艦列を敷いた戦艦群が、大口径熱線砲から豪雨のようなビームの嵐を注ぎ込む。ビームは、薄い大気によって些かも減衰させられることなく地表に達し、地表の施設を白熱の閃光に巻き込んだ。乾燥し切った砂漠をエネルギーの旋風が席卷し、レーダー施設、小型の砲塔、銃座などが閃光のなかで次々に碎け散っていく。地上戦用の小型ミサイルの格納庫を直撃した一弾は凄まじい誘爆を引き起こし、噴き上がった爆煙は地上数キロにまで達したほどである。

リユート基地は反撃しない。強化された防禦シールドに生命を託して沈黙を続ける。ペルヴィッツは命令している。数十隻の戦艦とともに撃ち合つては、要塞でもない補給基地は数時間で壊滅してしまう。シールドは大丈夫だ、異星人の降下、あるいは撤退まで持久せよ。

「反撃してこないな……」

クリュッペルは、リユート基地の奇妙な反応に戸惑いを禁じ得ない。「ドレド戦役」では、マールク艦隊の攻撃を受けたドレドの

補給基地は、いずれも必死の反撃を示したものだ。ただが。

オルデンドルフ参謀長が進言する。

「敵基地の周辺部は概ね破壊しましたが、中枢部のシールドは頑強で突破しかねています。降下作戦を行い、機動歩兵の手で基地を占領するべきでしょう。幸い、連れてきた七個師団は手付かずです」

「聞くべきところがある」

クリュッペルは同意し、降下作戦を命じる。五月一日、砲撃を中止した戦艦群の艦列の間から、駆逐艦と大気圏内艦載機に護衛された強襲揚陸戦艦の群れが、リユート地表への降下を開始したのである。

「引き付けてから撃て。効率的に、な」

ペルヴィッツからの命令が走る。ただし、四つの基地の内、応答するのは本部ともう一つ、第四基地だけである。第二と第三基地は破壊されたわけではない。基地と基地とをつないでいた光ケーブルは、地下数百メートルに厚い装甲とベトンで守られていたはずだった。しかし、数十隻の戦艦の斉射は深さ数百メートル、直径一キロにも及ぶ巨大クレーターを穿ち抜いた。ケーブルは、主ケーブルと予備ケーブルとともに空中へ巻き上げられ、破壊されてしまったのだ。

これは迂闊だった……とペルヴィッツは思っている。地上基地同士も、超空間波による通信設備を装備しておくべきだった。手間と費用をかけた割に、光通信システムは実戦向きではない。

揚陸戦艦の群れが地表数キロに達し、機動歩兵を放出し始めた瞬間に、リユート基地が火を噴いた。大口径熱線砲と中小口径の各種粒子砲が一斉に光のシャワーを噴き上げたのだ。

降下を開始したばかりだった機動歩兵は一方的に撃ちまくられた。反撃の余裕も与えられずに、ある者は猛烈な弾幕に包み込まれて蒸発し、ある者は急激な回避運動からコントロールを失って地表に激突する。揚陸戦艦『コロンバンガラ』は、リユート基地からの砲撃を回避しようと急激に旋回した。しかし、希薄とはいえリユートの大気が『コロンバンガラ』艦長オスボーン中佐の判断を誤らせた。『コロンバンガラ』が完全に回頭する直前、リユート基地の熱線砲が機関部を貫通。誘爆を起こしたエンジンが不幸な揚陸戦艦に制御不能の加速度を与えた。『コロンバンガラ』は、護衛の軽巡洋艦『トゥービー』の艦腹に激突。『トゥービー』は二つにへし折れ、艦首部が近くにいた揚陸戦艦『ケエゼリン』の艦首一〇〇メートルほどを筆りとって爆発、一方の艦尾部は右往左往する数百の機動歩兵を巻き込んで超融合爆発の閃光を咲かせた。「一体、何をやっているのだ！」

味方の余りの無様さは、クリュツペルを齒軋りさせる。

「降下部隊を撤退させ、支援射撃を浴びせよ。戦艦ではない。揚陸戦艦と駆逐艦から零距离射撃を叩きつけてやれ」

撃たれながら撤退するのは容易ではない。リユート基地はかさにかかって撃ちまくり、密集した共和国宇宙軍の降下部隊を薙ぎ払う。護衛の駆逐艦も次々に炎を吹き上げ、揚陸戦艦も機動歩兵を收容する瞬間を狙撃されて爆発する。

齒軋みしたクリュツペルは、戦艦部隊を展開させる。敵基地上空は敵味方が密集状態で支援射撃ができない。展開し、敵基地に対して接線方向からの砲撃を行え。今なら、敵基地はシールドを解いている。

“敵艦隊の一部、展開しつつあり”

クリュツペル艦隊の動きを、リユート基地ではやや遅れて捉える。連邦空軍の将兵にとって不幸なことに、報告がペルヴィッツの手元に届けられたのは、クリュツペル艦隊の展開が完了した後だった。

「拙いな……迎撃砲火を停止し、シールドを強化……」

命令を発した直後、地表を映しだすメインスクリーン一杯に広がった閃光が、ペルヴィッツの顔を漂白した。

「どうした？」

「第三基地です。動力炉、もしくは超融合核ミサイルサイロを直撃された模様。基地は壊滅です」

ミサイルが防禦シールドを突破した瞬間に、戦艦の主砲が直撃した。誘爆は誘爆をさそって基地を内側から破壊し、一切を宙空に吹き上げる。

続いて第二基地も破壊された。戦艦からの支援砲撃で突入に成功した機動歩兵が、白兵戦の末に基地の動力炉の占拠に成功。残兵を撤退させた基地司令官は、思い切った策で最後の反撃を試みた。動力炉の制御を切り、超融合反応を暴走させたのだ。当然、動力炉は爆発し、基地内に蓄えられた超融合ミサイルを誘爆させる。

「敵基地、自爆！」

一個連隊以上の機動歩兵が誘爆に巻き込まれたとの報告に、クリュツペルは天を仰いだ。

「なんと……無様な戦いだ……」

誰を責めるわけにもいかない。クリュツペルはそれを知っている。マールクならこんな無様な戦い方はいらないだろう。

「無理をする必要はない。敵基地の半分はこれで陥れた。一旦、

降下部隊を衛星軌道上に撤退させる。あす、攻撃を再編して残りの二つを破壊してしまえばよい」

攻撃の継続を訴えるオルデンドルフらの意見を、彼が退けたのも、余りに無様で不手際な戦いぶりに嫌気がさしたから、という一面があつたことを否定できない。しかし、クリュツペルの批判者は言う。マールクならここで攻撃を継続させ、残りの二基地も一挙に破壊したことだろう。そうしていれば、彼と彼の艦隊は少なくともドライバウム要塞への帰還を果たしていただ、と。

批判したのはネイス・ミュッケルの幕僚の一人である。件の幕僚に向かつて、しかし、ミュッケルはあつさりと言いつつた。「クリュツペル提督は、自分のできる範囲は十分にやるべきことをやつたのです」

いずれにしても、攻撃を中断したことは致命的だつた。ペルヴィッツと彼の部下たちは一息いれる機会を与えられ、それよりも翌日、共和国暦六月二二日、アンリー・シャルブックの艦隊がクリュツペル艦隊の索敵網に捉えられたのである。

「一五〇〇隻の艦隊？」

「は、太陽方向、距離は三〇〇〇光秒、七時間半後、当宙域に達します……」

「拙いな」

降下部隊を連れているために、第八艦隊の速度は決して速くない。シャルブックの艦隊も決して高速ではないが、決断に手間取つていれば追いつかれ、倍の兵力を相手の苦戦は免れ得ない。

恒星系からの撤退には何人かの艦隊参謀が激しく反対した。我々の使命は惑星コーウインの占拠である。その任務を果たせず、無意味に多くの戦死者を出しただけで撤退するなど、誇りある共

和国宇宙軍人としてあるまじき行為である。

「貴官らはそう言うが、艦隊戦では倍の敵と戦つて勝てるものではない」

「ドライバウム回廊宙域会戦」では三倍の叛乱軍艦隊を殲滅しました」

「マールク元帥は天才だ。翻つて我々は天才ではない。天才を模倣することは、凡人にとっては致命傷になりかねない……撤退する。コーウインには現住の住民があり、我々共和国宇宙軍に匹敵、もしくは凌駕する軍備を保有している。第八艦隊が派遣された前提は、コーウインは無人であり、軍事的な抵抗力がないと言うものだつた。前提が崩れた以上、作戦を継続することはできない。以上だ」

「しかし、共和国宇宙軍の名譽はどうなるのです。我が軍の、輝かしい不敗の栄光を、司令官閣下は辱めるおつもりですか」

「以上、といったはずだが」

クリュツペルは眉をひそめる。以上、とは命令の終了を示す。司令官の最終的な判断を示すものだ。なお、反論するのは最悪、抗命罪を構成する。

「小官は、共和国宇宙軍の名譽のために異議を申し立てております」

件の艦隊参謀は平然とした調子だつた。

「司令官閣下が具申を容れてくださらぬ、とあれば、参謀総長閣下に直接具申を行うまでのことです」

「もう一度言う。以上だ。下がれ。貴官の意見を聞く必要はない」何が「不敗の栄光」だ……マールクとロメイチェフが現れるまで、共和国宇宙軍はドレド宇宙軍に連戦連敗。数万隻の艦艇を失

い、数百万の屍を戦場に積み上げていただけではないか。

艦隊参謀は、憎惡のこもった眼差しでクリュツペルを睨み据えたあげく、くるりと踵を返した。敬礼もしなかったが、非礼を咎める気に、クリュツペルはならなかった。

クリュツペル艦隊は慌ただしく撤退の準備にかかる。シャルブックの艦隊は、さして急ぐでもなく巡航速度で接近してくる。それでも、地表に降下した機動歩兵を収容し、散発的な反撃を加えてくるリユート基地に応戦しながら艦隊を纏めて、衛星軌道を離脱したとき、シャルブックは時間にして二時間の距離に接近していた。

「なんとかなる……か」

交戦を避けて星域外に出、ワープに入るには、二時間という余裕はぎりぎりのものとは言えない。少なくともシャルブック艦隊が急に増速しなければ。

が、第六番惑星の公転軌道に達する前に事態が急変した。シャルブック艦隊が急速前進に移ったのだ。

「哨戒艇より！ 敵艦隊増速。相対距離詰まります」

「な……」

ワープ可能域に入ったとき、シャルブック艦隊との距離は一〇数分のオーダになる……との計測結果にクリュツペルは思わずうなった。

「速度はこれ以上は無理か？」

「輸送船を遺棄しなければなりません……」

無人の補給船は特に足が遅い。しかし、補給船を遺棄してしまえば、第八艦隊はドライバオム要塞からの支援を期待できるまでの約数百光年を、補給なしで乗り切らねばなくなる。

「必要最小限度を遺して遺棄せよ」

後方参謀は絶望の表情で首を振る。

「現在ですでに必要最小限の物資しか残っておりません」

共和国暦六月二十四日、連邦暦一四月八日、クリュツペル艦隊から一〇〇光秒の距離に迫ったシャルブックの艦隊は凹字型の陣形に大きく展開する。砲戦距離にはまだ遠かったが、倍の連邦空軍艦隊が左右に大きく展開する様は、戦い慣れていない第八艦隊將兵を浮き足立たせた。

「応戦するな、このままの速度を維持して星域を離脱する」

クリュツペルの命令も徹底しなかった。一部の部隊が独断で応戦態勢に入り、クリュツペルは激しく叱責して艦列に引き戻す。その間に、また別の一部隊がシャルブックの挑発に反応かけては司令部に引き戻された。

戦艦『ノースラン』号以下の連邦空軍第三艦隊の主力一五〇〇隻が、第六番惑星ヘルムの衛星宙域から躍り出したのは、クリュツペルの艦隊がヘルムに最接近した時である。後方から迫ってくるシャルブック艦隊に注意力の全てを吸い取られていた共和国宇宙軍は、前方には完全に無警戒だった。

「前方より、新手の敵艦隊一五〇〇！」

オペレータが悲鳴を上げ、艦隊司令部の神経を乱打した時、シユタルク艦隊はクリュツペル艦隊の艦列に躍りこんでいたのである。「主砲斉射三連。続いて宙雷斉射。艦載機と格闘戦集団はただちに突入せよ」

狼狽し、艦列を立て直し得ない共和国宇宙軍艦隊の姿に、シユタルクは完全な奇襲の成功を確信した。狂暴なエネルギーの槍を立て続けに投擲する巨大な戦艦群を縫うように、新型艦載機の大

群が飛翔し、宙雷艇、突撃艦の群れが一団となって突進する。

“敵、突入してきます。多すぎる。弾幕を、弾幕を”

“こちら前衛集団指揮官、被害甚大、被害甚大、救援を！”

一方から注ぎ込まれる膨大な破壊力の奔流が、防禦シールドを突破し、一瞬の数分の一のタイムラグをおいて金属の装甲を素粒子レベルに粉碎する。ル・ラント艦は、一瞬のはかない抵抗の後、かさにかかった連邦空軍艦艇の集団の叩きつける光の槍に八方から串刺しにされ、あるいは艦載機の群れに切り刻まれていく。

この時、レフラム・ネレイドが案出した戦術は、全突破力を単一方向に集中し、一気にクリュッペル艦隊の中枢を直撃するというものだった。そして、大方の前線指揮官の危惧を裏切ったことは、クリュッペル艦隊が驚くほどの速さで艦列を解体されていったことだった。

「敵艦隊旗艦と思われる戦艦を発見。目標至近」

「宙雷、斉射！」

クリュッペルの旗艦を発見したのは、駆逐艦『ネフレスト』と『フィユレウス』である。二〇発の超融合核宙雷が斉射され、オレンジ色の奇蹟で戦場をまつぶたつに切り裂いて突進する。ル・ラントの戦艦は急速回頭。同時に対空砲を全開。数発の宙雷が撃破され、煌めく純白の閃光が戦艦と駆逐艦の間の空間を席卷する。

「第二斉射！」

さらに二〇発。第一斉射を躲した戦艦も、より至近距離から放たれた第二斉射をよける時間的な余裕はなかった。

「宙雷接近。多数。回避不可能」

「なに……ば、馬鹿な」

うめくクリュッペルの視界が、凄まじい衝撃とともに漂白され

た。一〇発の超融合核宙雷が戦艦を直撃。内、四発が装甲を突破して艦内で炸裂する。

超高温の熱線と、爆風、殺人的な放射線の嵐が搭乗員を瞬時に薙ぎ倒し、格納庫の宙雷と動力炉を誘爆させた。衝撃と破壊は艦橋にも及び、クリュッペルは指揮シートから吹き飛ばされた。数メートルを飛ばされて壁面に激突、破壊され、定位置からもぎはなされたコンソールや機器類が彼に続いて壁面にめりこんだ。凄まじい熱風が艦橋に吹き荒れ、悲鳴と怒号、破壊音を圧倒する。

生きながら焼かれる苦痛を、たつぷりと味わいながら、クリュッペルは幕僚の名を呼ぶ。全滅したらしく、答えるものはいない。激痛が吹き上がり、声の代わりに鮮血が咽喉の奥から迸り出たのが、彼の視界に焼き付いた最後の光景だった。数分間、炎の中で苦悶続けた戦艦は、搭載した核爆弾の誘爆によって間もなく断末魔に終止符を打った。

指揮の中枢を失った共和国宇宙軍の第八艦隊は、当然組織的な抵抗力を奪われた。何隻かの艦艇は、搭乗員と指揮官の個人的な力量によって戦場から脱出したが、多くは絶望的な抵抗を繰り広げた後に破壊されるか、降伏の道を選んだ。特に、共和国公用語によって“降伏せよ。シエルメス連邦空軍の名において、寛大な処遇を確約する。貴軍の指揮系統は失われた。抵抗は無意味である”と呼び掛けられると、動力を停止し、降伏する旨を発信する艦が急増したのである。

連邦暦一四月九日早朝、シユタルクは戦闘の終了を宣言する。来航した一二〇〇隻近い共和国宇宙軍の艦艇は、六〇隻前後が脱出に成功したのみ。四〇〇隻以上が破壊されるか大破させられ、七〇〇隻近い艦船が第三艦隊の捕獲するところとなって、“ヘル

△宙域の遭遇戦”は終了する。のちに“シュネーゼル事変”と呼ばれた、連邦空軍と共和国宇宙軍最初の艦隊戦闘は、連邦空軍のあつけない勝利で終決した。